



磯田道史の

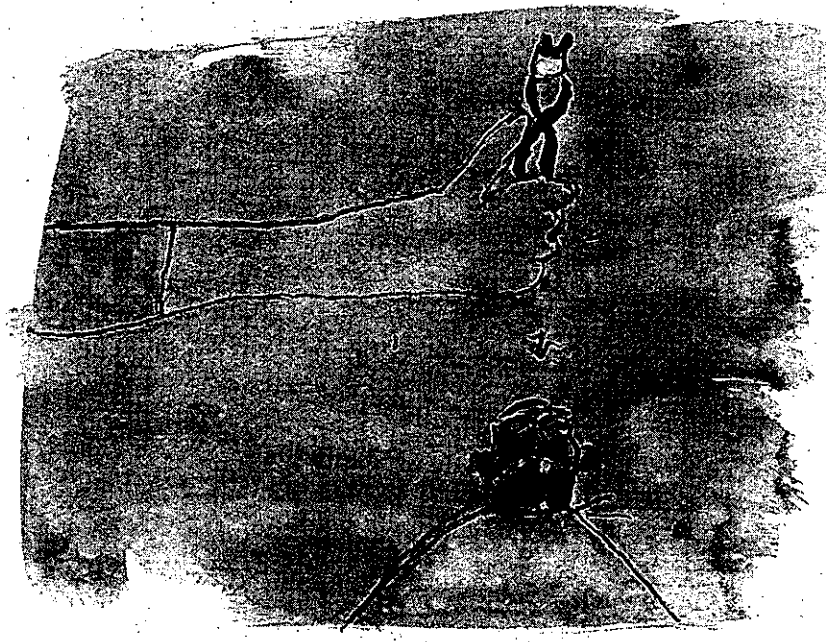
あきひら

題字・種村 山童

8年前の春、インターネット上で偶然、「西郷隆盛の手紙」が発見されているのをみつけた。西郷隆盛の書は偽物だらけだが、宛名をみて、ピンときた。「土倉修理助様 西郷吉之助」。土倉修理助とは岡山藩の家老・土倉正彦(1万石、新政府参与)。以前、土倉家の文書が古本市に出ていたのをみた気がするから、この書簡は、そのツレ(出所が同じ)で、本物の可能性が高い、と思った。

私の先祖は岡山新田藩の藩士で、親戚一同この土倉とともに入京し、戊辰戦争に加わっている。西郷が岡山藩に宛てた書簡はその存在自体が珍しい。俄然、興味がわいてきた。とにかく、現物をみておこうと、この書簡を販売している京都の古美術店に行った。店主が「西郷南洲書簡扁額」を抱えて出て来た。やはり本物にみえる。ネット上で売られているのだから、放置すれば、誰かに買われ、故郷の岡山に戻らなくなる。私が買ってあげば、いずれ岡山の資料館にでも収まるだろう。古文書は滅多に買わないとこしている

西郷書簡 歯科との接点



画・村上 豊

が、思わず「いくらか」ときいてしまった。「9万5000円」と店主がいつから、高いか安いかわからぬが、買って帰った。家で解読してみた。「御手紙くださり有り難く拝讀しました。明日早朝に弊宅までお立ち寄りくださるごとき、御手数になり、御礼申し上げます。いづれ御懇志にすぎり、お待ち申し上げますので、よろしくお願ひ申し上げます。この分お礼言上かへの如く。正月十五日 西郷吉之助」(現代語訳)とあった。

これはおそろしく慶応4年(1

868年)1月15日の書簡だ。鳥羽伏見の戦いが終わって9日後だ。この日、西郷は岡山藩家老の土倉に会う必要があった。神戸事件である。鳥羽伏見の直後、岡山藩兵と西洋列強の軍隊が神戸の町で偶発的に衝突、交戦した事件である。

まず岡山藩の隊列をフランス水兵が横切った。隊長の滝善三郎が制すると、短銃で狙ってきただので楯で突き、撃ち合いに発展した。運悪く、西洋列強の公使が近くにいた。その頭上を弾丸が飛んだ。英公使パークスが「文明国にあるまじきこと」と

激怒。仏兵・英兵・米海兵隊などが神戸一帯を占領する事態になった。背後を外国軍に占領されては、江戸の旧幕府軍を攻めに行くどころではない。

西郷は困った。事態收拾のため、岡山藩の家老と面談する必要があった。今回、調べてみると、この書簡はその時のものらしく、西郷の全集にも載っていない未発見の史料であった。西郷の文面はへりくだって実地に丁寧である。この時の交渉こそが、日本の新政府が最初に行った外交交渉だ。結局、新政府は岡山藩の隊長・滝善三郎1人を切腹させて決着させた。岡山藩は米海兵隊と最初に戦って、苦杯をなめた。

実は私の5代前・磯田由道の甥・高山紀高がこの神戸事件の現場、隊列中にいた。彼は今度こそアメリカに負けまいと思っただか軍人政治家をめざし米國に留学した。しかし虫歯になった。治療してくれた米國人に説得され進路変更。歯医者になり、帰国して現存最古の近代歯科医学校を創った。これが東京歯科大学になる。大正天皇の乳歯も彼が抜いた。

この記事のため、滝善三郎の子孫を探して、岡山市の広瀬町に電話をかけた。子孫が出て「滝家も、その後、代々歯科医です」といわれた。神戸事件は日本の歯科の発展につながったのか。戦争は痛い。虫歯を治すほうがいいにきまっている。くだんの西郷書簡は今も私の部屋にある。

(日本史家)

文化 Culture 歴史